

# 短編ドラマ脚本

## 『干し芋』

著:[夕凪]

### 短編ドラマ『干し芋』

#### 【登場人物】

テル(70代)

寡黙で、強く、優しい。誇りを背中で語る人。

節子(幼少期／大人)

祖母の背中を見て育ち、大人になってその意味を知る。

千代(幼少期／大人)

節子の親友。こういちの妹。日常を共にした友達。

こういち(幼少期／大人)

ガキ大将。群れの先頭に立つが、内側には小さな良心が揺れている。

悪ガキたち

生きるために必死だった子どもたち。

---

#### 0 ナレーション(冒頭)

---

●ナレーション(大人の節子)

「昭和三十年ごろ。

町はまだ昨日の続きを生きていた」

---

#### 1 外・テルの家・冬の朝

---

白い息。湯気の立つ蒸し器。

テルが芋を洗い、蒸し、薄く切って軒先に並べる。

幼い節子が縁側で見ている。

そこへ千代(幼少)が駆けてくる。

千代(幼少)

「せっちゃん、遊ぼ！」

節子(幼少)

「うん。でも、ばあちゃんの手伝い終わってからね」

千代はテルに向かって元気よく頭を下げる。

千代(幼少)

「おはようございます！」

テルは小さく頷き、節子の肩にショールをそっとかける。

節子(幼少)

「ばあちゃん、あったかい」

テル

「……そうかい」

千代はその様子を見て、少し羨ましそうに微笑む。

●ナレーション(大人の節子)

「一緒にいるだけで安心できて、  
その背中がそこにあるだけで、  
世界がちゃんと回っている気がした」

---

## 2 外・軒先・夕方

---

干し芋が減っている。テルは静かに見つめるだけ。

節子と千代(幼少)が帰ってくる。

節子は減った芋に気づき、ふと立ち止まる。

千代も視線を追うが、何も言わず隣に立つ。

---

## 3 内・居間・夜

---

節子が祖母の背中を見つめている。

テルは黙々と芋を切っている。包丁の音だけが響く。

節子(幼少)

「ばあちゃん、手……痛いの？」

節子はそっとテルの手を包み、小さくさする。

テルは一瞬驚き、ふっと表情を緩める。

テル

「……おや。節子がさすってくれたから、痛くなーい」

節子は嬉しそうに笑う。

テルは節子の頭を軽く撫でる。

●ナレーション(大人の節子)

「ばあちゃんは、強かった。

でも、その強さの奥には、いつも優しさがあった」

---

#### 4 外・町の路地(夕方)

---

こういちや悪ガキたち。空腹で寒さに震えている。

こういち(幼少)

「……腹、へったな」

悪ガキA

「今日も……ある」

こういちは一步前に出る。

こういち

「行くぞ」

子どもたちは軒先へ。干し芋を一枚ずつ取る。

その瞬間——家の奥に、人影が“あった”。

動いたのか、ただ立っていたのか、見ていたのか分からない。

子どもたちは走り去る。

こういちは一瞬だけ振り返るが、もう何も見えない。

こういちの表情に、ほんのわずかな違和感が残る。

---

#### 4-2 外・路地裏(直後)

---

悪ガキたちが息を整えながら芋を分け合う。

悪ガキB  
「バレてないよな？」

悪ガキA  
「誰もいなかつたって」

こういちは少し離れた場所で立ち尽くす。  
手がわずかに震えるが、誰にも見られたくない。

わざと大げさに大口で芋にかぶりつく。

こういち  
「……ほらよ。うまいじゃねえか」

声は平静で余裕すら漂うが、  
胸の奥に小さなざわめきが生まれている。

---

## 5 外・テルの家・翌朝

---

節子と千代が並んで座っている。

テルは残った一枚を節子の皿に置く。

節子(幼少)  
「ばあちゃんの？」

テル  
「節子のだよ」

千代は少し羨ましそうに笑う。

テル  
「千代にも、あとで蒸したのをあげるよ」

千代(幼少)  
「ほんと？」

節子と千代は顔を見合させて笑う。

●ナレーション(大人の節子)  
「ばあちゃんは、誰にでも優しかった。  
でも、私には少しだけ特別だった気がする」

---

## 6 外・町の風景(季節の移ろい)

---

・雪の日、節子がテルの袖を握る  
・晴れの日、干し芋を並べるのを手伝う  
・風の日、節子がテルの背中に隠れる

• ナレーション(大人の節子)  
「ばあちゃんの背中は、私の居場所だった」

---

## 7 内・居酒屋・夜(現代)

---

こういち(大人)  
「なあ、覚えてるか。  
お前のばあちゃん、毎日芋を干してたろ」

節子  
「覚えてるよ。毎日だった。  
なくなっても、また次の日には干してあった」

こういち  
「……あれな。  
俺たちが食ってたんだ」

節子は言葉の意味がすぐには分からぬ。

こういち  
「あの頃、腹が減ってどうしようもなくてさ。  
軒先の芋は、いつでもあった」

こういちは少し目を伏せる。

こういち  
「影があったんだよ。  
見てたのかどうかは分らないけど……  
あれは“気づいてる人の影”だった」

悪ガキB  
「俺たち、ずっと“バレてない”と思ってたのに……  
違ったんだな」

千代(大人)は静かに節子の手を握る。

こういち

「お前のばあちゃんのおかげで、  
俺たちは飢えをしのいで、生き延びたんだ。  
今こうして生きてるのは、あの干し芋のおかげだ」

節子の中で、あの日常の風景が違う意味を持って立ち上がる。

---

## 8 外・帰り道・夜

---

節子と千代が並んで歩く。

千代(大人)  
「……せっちゃんのばあちゃん、すごい人だったね」

節子  
「うん……。  
あんなふうに誰かを助けてたなんて、知らなかつた」

千代は節子の手を握る。

千代  
「でも、優しい人だったってことは……  
ずっと知つてたよね」

節子は静かに頷く。

節子  
「うん。  
ばあちゃんは……そういう人だった」

---

## 9 外・軒先(回想)

---

夕陽の中、干し芋が揺れる。  
テルの背中は、まっすぐ。

●ナレーション(大人の節子)  
「——あの干し芋は、  
テルばあちゃんだったのだと、  
私は、ずいぶん時を経て、ようやく知つた」

---

ラストショット

---

干し芋が風に揺れる。

静かな余韻。

フェードアウト。